

文化と語学教育とナシヨナリズム

山口昌男（札幌大学学長／文化学部教授）

このフォーラムもだいぶ長く続いてきて、世間の信用も少し増してきたような感じがあります。そこでもう少し戦闘的になって、文化学部が一貫して追求しようとしているものは何かということや、ペーブルをかなぐり捨ててお話ししたほうがよろしい時期がきているんじゃないかと思えます。話は語学で、始めは処女のごとく、終わりは脱兎のごとく走ります。

実をいうと去年から浮上してきているテーマというのがあります。それはどういふことかというところ、短大主催の企画に協力して、崔洋一監督が作った『月はどつちに出ている』という映画を学生の諸君と見た。その時学生の感想を聞いたら、こんなくだらん物語で映画作ってよく監督が成り立つと怒る学生、美しい日本を破壊されたと怒っている学生から、いやこついついふうなめちやくちやのずつこけはよろしいというものであった。

崔監督自身が在日韓国人の二世で、それで唐十郎のところに入入りしていた人です。この映画は韓国人の母親とともに日本で育って、韓国系のタクシー会社の運転手をやっている主人公の話。恋人はフィ

リピン出身の女の子。場所は大阪なんですけれども、そこで一番強い印象を受けたのは、主人公とお母さんは普通の日本語らしい日本語をしゃべっているんだけど、そのガールフレンドたるやひどい日本語をしゃべっている。しかしながら多くの学生も私も同じ意見だったんですけれど、あのメチャクチャインチキ大阪弁が一番面白く魅力的だった。だから日本語を破壊するというよりも作り替える、そういうものがあの映画の姿勢に、アナキーな要素こそ素晴らしいという形で流れていたという印象を持った。ところでほんとに安定した日本語なんてあるんだろうかという話に結びついていったわけですね。本来国語とか国語学なんていうのはいつころでできたものか。今教員免許状を取るために国語学の教員国語の教員というけれど、国語の国という字はなんだ、普通の人の意図なんか反映しているかというところまで反映していかないだろう、というところからはじまって、これから現在の話に移ります。

*文化のクレオール化

先週はマリズ・コンデさんというフランス人の作家に北方文化フォーラムで話をしてもらいました。彼女はフランス領でカリブ海に浮かぶマルチニック島の近くのグアドループという島の出身で、パリのソルボンヌで博士号をとって、それから二十年位アフリカの各地で教えていた。カリブ海域、そこでしゃべられている言葉は、非常に独特なクレオール語というチャンポンな言葉です。あの辺はクレオール語の中でも特に特徴的な言葉でパピメント語というのがあって、アフリカの言葉と英語とフランス語とスペイン語がごちゃ混ぜになった言葉さえしゃべられている。そこでこれから先に行く前に、フランスの大統領と会った時の話をしたいと思います。

一昨年、自由の女神の点灯式かなにかに大統領が現れました。その時にフランスの大統領が日本の指導的な立場にあるとみられる芸術家及び大学教師と会って話をしたいと言って、三島由紀夫の『宴のあと』で知られている「般若園」という料亭で、大統領夫妻と昼めしを共にした。日本側は日本文化会館の館長で元NHKの磯村(尚徳)氏が司会を務めまして、年の順にいきますと加藤周一というフランス派知識人の代表的存在がいて、詩人の大岡信さん、その一年年下の私、それから東京大学のフランス語の先生の小林(康夫)さんと、コンピューターで著名な西垣通さんがおったわけです。

話が始まったらフランスの大統領は真つ先に私に話を振ってきて、「ムッシュは人類学者だと聞いているからまず尋ねたいんだけど、スペイン語なんていう言葉はこつこつに国際言語が発達してくると二十年もたったら消えてしまうと思いませんか？」と　またはっきり言うもんだと思つたから、「いやー大統領、申し訳ないけれども、スペイン語より先に消えるのはフランス語じゃないかと思つ」と言つたんです。

それはどういう意味かと聞くから、大統領は機械翻訳のことを頭において言っているんだと思つけれども、機械翻訳でいつたらスペイン語の方がアプサンが一つくらいしかない、フランス語の方は「ごちゃごちゃ」、「……」こんなものいちいち機械翻訳するための手間ひまたるや大変なもので、そういう点でフランス語は国際語として生き残るかどうかが分からない。私はパリに行つたらよく画廊を訪ねて画廊の持ち主の年寄りと話をするのが好きなんです、その年寄り達が同様に嘆くのは、この頃の若者達はフランス語の語彙が極端に減っている、電話ばかりで話しているから、ウイと言つたらその次の言葉が出てくるまで一時間位相手の物音に耳を澄まして、言っていることは別に聞いていないみたいだ。そんな調子だからボキヤブラリーがガタガタ減っている。それに比べるとグアドループとかマルチニクと

かそういうところから来たフランスのリセ^{II} 高等学校を終わった学生たちの方が、はるかに正しいフランス語をしゃべると。

というところで、大統領が「どうしたらいいの?」と聞くから、「もう言語というのは数限りない生成と死滅を繰り返してきたんだから、滅びても仕方がないんじゃないですか」と答えたら、「そんなことでいいの?」なんて言うから、人のことだからどうなってもかまわんとは私は言わなかったけれども……。そうしたら東京大学の小林教授が助け船をだしてくれて、これはなかなかいい助け船でした。「いや大統領、これは必然のなりゆきであって、そういうふうな状況のために最近はクレオール研究とかクレオール科、クレオリール研究というのが盛んになってきている。フランス語もいずれクレオール語として残るから大丈夫ですよ」と、「そうか、そのような便利な方法、脱出の道があったのか、それじゃありがたい」と、私はフランス語の先生だから調子のいいことを言つと思つて、その話がずつと続いていったわけでございます。

話を本筋に戻しますが、マリーズ・コンデさんを連れてきたのは札幌大学文化学部に加わった今福龍太氏、秋からこの大学に移つて教えますから彼の主張ははっきりしてくると思ひますけれども、マリーズ・コンデを連れてくるだけあってクレオール化というテーマの理論的チャンピオンである。要するにクレオール化とは雑食性、沖縄でいえばチャンポンということ、人間はチャンポンがあるべき姿なんだと。純粹なフランスとか純粹な日本とか純粹なイギリスとかそういうアイデンティティらしきものは世界の流動的な状態に対応するためには邪魔になっている。純粹とか純血とかではなくいつも人間は過渡的(仮設的)な状態にある、そのことが周りの環境に向けて全開しているために必要なことであつて、マリーズ・コンデさんというのはその代表的な人である。

結局コンテさんの要旨は、簡単に言いますと、純粋なアイデンティティはもはや存在しないだろう。自分の経験から言って、自分はグアドループで生まれてクレオールフランス語で育って、リセ（高校）に行つて、大学はソルボンヌに行つて博士号まで取つた。しかしアフリカに行くとき皆にいじめられた。黒人の顔をしている変な白人といつていじめられた。教師をアフリカで二十年間やつたけれども、そういうことがあるから、自分の立場を保証するものはカラーでも言葉でも国籍でも何でもないといいことから始まって、四十の半ば過ぎてから小説を書きだして、フランスでも何冊か出ているけれども、その内何冊かは三十万部売れたということ、アメリカではコロンビア大学の教授として教えている。そういう立場から、要するに雑種性ということがいまや正當な人間の根拠になりつつあるという話を、雑種的なアフリカ系の人間というのはどのようにしてできてきたか、ゴンクール賞を五十年くらい前に取つた、やつぱりマルチニック出身のルネ・アラン（『バトウアラ』という作品でゴンクール賞をとり、昭和七年に日本語訳された）という作家の話とか、いろいろ具体的に話したわけです。

*危機としての文化

この学部は比較文化学部として構想されていると議論を重ねてきて、文化の比較は本当に可能なのかといふところまで話が煮詰ってきている。つまりこの文化といふのは、自然に存在するものではないだろう。そうだとすると様ざまなレベルで文化は語られなくちゃいけない。総括して国単位で文化を語るといふやり方、それを比較するといふやり方は、ヨーロッパの知的な基準を中心として、そういった視点から行われていることが多い。実際の人が生きている生活体験とあまり結びつかないところ

で二つが勝手に紹介されて、似ているとか似ていないとか、それだけの話になる恐れがあるのではなからうかという疑問が常につきまとつわけです。

そこで、学生をも含めて札幌大学文化学会というのを作り、雑誌紀要を発行することにした。その時の考えとして、文化というのはえてして安定したものでだけでは出来ていない、むしろ文化は自分たちが主張するものに対して反対な要素を絶えず取り込んで、自分たちが危機に直面する、そういうものである。雑種性とは安定したアイデンティティに対して揺さぶりをかけるわけです。揺さぶりをかけるような、外から入ってきたばかりのものとか、そういうものをまず危機として捉える、そういうものがないと思つたら、むしろ積極的に危機を取り入れる。異質な要素をふんだんに持つたものをシステムの中に取り入れてバランスを保つ。そうした視点が文化と言われるものを生き生きと捉える方法ではないか。

こうした状況の中で語学教育が問題にのぼってくる。そうすると留学生の諸君の問題がすぐに話題になる。一人の学生の例を述べさせていただきます。

その学生はモンゴルで育つてモンゴル語は自由にしゃべつていて、中国語もドイツ語もロシア語もしゃべるといつ。そういう学生に、日本の教育の「外国語」という観念では必修科目だからといって強制的に英語を学ばせる。日本人の感覚としては、モンゴルで育つて中国語をしゃべつたらそれでも外国語を一つやつていないか。今は日本語も普通にしゃべる、それにロシア語があったら、日本で教えている平均的な学部の大抵の先生よりも　一番沢山しゃべる芸林先生は何力国語しゃべる？　英語　日本語　フランス語　イタリア語　四力国語　ところがその学生は日本語を入れて五力国語しゃべっている。芸林先生より一つ多いわけです。それでも強制的に子供から始めるように英語をやらせぬ。

モンゴルでは小中高、英語をやってないわけですから、これはやっぱり強制連行した留学生の言語教育の名を借りたたこ部屋といつべきではないか。

* 語学教育の問題性

英語だけが必修科目となっていて、たとえば東南アジア文化を比較するときどうして英語が一番先に頭に浮かぶのか。入れてもかまいません。しかしこれは選択にすべきであって、やりたい学生にはどんな先生が協力して、英語というものをいかに使いこなすか、実践力を備えてもらうように努力する。けれども中学校、高等学校と英語の科目を取って、大学に来てまで出来ないといつんだったらやらないほうがいい。

要するに英語というものはそれ程理想的な言葉か。私がここで言っても言いきれないわけだけれど、最近広島大学を定年で辞められた大石俊一さんが、『英語支配 終焉にむけての個人的想念 イデオロギー批判とユートピア思考』という文章で、二十一世紀に向かっては言語のユートピアを実現するために英語が邪魔になっている、という種類のことを述べているわけです。国際的な共通言語なんて幻想に過ぎない、どんな言葉でも共通言語なんてことはあり得ない。というのは、共通言語は日常の効用性に基いているから、人間が自分の存在を示すための芸術的な部分を含めた完璧に近い国語を持つことは不

*『英語支配への異論——異文化コミュニケーションと言語問題』津田幸男編著

(第三書館 一九九三年刊)に所収

可能だと。

第一に、英語英文学という概念が、最近のカルチュラル・スタディーズの進展の中で消えてしまっている。英文学史なんてイギリスの大学の講座でだんだん成り立たなくなりつつある。私も去年（一九九七）の八月と十一月にオックスフォードに寄ったときにブラックウエルという一番大きな本屋さんに行ってみた。五、六年前本をあさったときの英文学の棚が三分の一以下になっているわけですね。そのかわりカルチュラル・スタディーズがやたらに膨れ上がっている。これにも問題があると考えないわけではないけれど、それとともに文化人類学ですね。イギリスでは社会人類学と言っている。皆さんに植民地の学問、たかが普通の旅行者より少し長く滞在しているに過ぎない連中が、専門家と称してアフリカのことなんかを勝手に書くのはおかしいという批判がだいぶありまして、その奥にあつた文化人類学の棚が全部消えちまつてる。文化人類学が消されてしまっているんです。

それを反映してか、紀伊國屋は文化人類学の棚を消しちゃっているんです。そういう変わり目に来ている文化人類学の特定の本はどこへ行つたのかと探すと、カルチュラル・スタディーズの中に散らされている。蹴散らされた文化人類学という感があるわけです。

一九三〇年代にイギリスの植民地行政人類学者R・S・ラトレイという人がいて、この人がガーナの奥地についての本を書いた。そこで彼が書いたことは、植民地の行政官が現地に行つて一番気を付けないくちやならないのは、一番最後に英語をしゃべるような振りをして現れてくる土地の人間だと。この人間達は利権を独占するという隠れた意図を持っているから、我々が言いたそうなことを見抜いて先に答えたりするから、我々はつい彼らに頼りがちである。その結果彼らは、我々と土地の普通の英語をしゃべらない人間たちとを結びつけるどころか切り離す傾向にある。これはなかなかの名言であつて、日本

でもフォークロアの調査で地方に行ったときに、最初に現れるその土地土地の知識人と思われる人は、自分の利益に合わせてこちらをコントロールする。コントロールして従わざるを得ないほど土地の人間と自分たちを引き離してゆくという現象が起きる。まさに全世界における英語のスピーカーと、現在はイギリスというよりもアメリカとの関係がそうなってきた。

もう一つの問題はインターネットが発達した結果、今のところ国際的には英語しか使えないということとで、機材を売りつけている。産業のレベルにおける攻撃であり、同時に英語支配である。現在文部省がアメリカの下請け機関みたいになっておりますから、各大学が文部省のいうことを聞くかどうかが、率先して若者をコントロールする手段としてインターネットを使っていくかどうかという形になっている。こちらから世界に向かって発信する能力をいかに養って行くかということに眼が移らなくて、アメリカから流れてくる二次三次四次、五次ぐらいの情報をかささらう位のことしかできなくなる恐れがある。

言葉でも英語が好きで学生にはほとんどん手助けをする。それで英語を実際に使っている英語国民を越えるぐらいの情報発信能力を養う。

現在のところ文化学部は、比較文化を前提とするわけだから、アジアの諸国ともほとんどん付き合つたために、ヨーロッパ以外の国の言葉を下手でもいいからしゃべる。フィリピンのタガログ語をやる、英語はかなりしゃべっても、私なんか三十年位付き合っているけれども、お前の英語は下手だなという顔をすぐされますよね。しかしこの間一九九八年五月、ウイーンに行ったとき、ハンガリーの学者が、英語で書いた私の「タルトウ学派の光に当たった文化の中心と周縁」が、ハンガリーの『象徴』という雑誌にハンガリー語に翻訳されて出版されていたから君にあげるよといってくれたことがある。だから、とに

かく日本語以外で書くことは必要である。それが英語に限らずインドネシア語でありタガログ語でありタイ語でありヒンディ語でありベンガル語であったつてよろしい。それを片言でもしゃべるような若い人間が増えていった方がいい。近隣の諸国の言葉をですな。

いま札幌大学の文化学部では朝鮮語、中国語、ドイツ語、フランス語も選択できるとなっているけれど、英語が必修になっているのがかなりネックになっている。東南アジア、南アジアの言葉を教える人がいないなんて言わないで、何か工夫して学べるようなシステムにすることが必要だ。せいぜいここで覚えるぐらいの英語をしゃべってイングリッシュスピーカー達にバカにされるよりも、下手でも東南アジアの言葉をしゃべったほうが、アジアでどれだけ日本人は愛される度合いが深まるかわからない。私でもインドネシア語はしゃべります（程度は別として）。語学の教育の場合、先生は四力国語とは言わないけれど、最低日本語以外三方国語ぐらいをしゃべる、そういうものが本当の語学教師の教養というべきではないか。イタリア語しゃべっているつもりで気がついたらスペイン語しゃべっていたとか、そういうことになってよろしいんじゃないか、と感ずるわけです。

* 国語というイデオロギー

そこで、英語を離れて国語学の問題にきますとまた厄介で、江戸時代には国学はあったかもしれないけれど、これは神道を中心とした靈魂を体得するための、江戸時代なりのシステム教育であった。ところが国語学というのは明治時代のある時期にはじめて作られた。どうも上田万年^{かずし}あたりが言い出し始めて、それを保科孝一という国語学者がお国の役に立つたためにということとで理論を継承する。それを発展

させたのが時枝誠記先生である。

時枝誠記は戦後も東京大学国文学科国語学の教授であったわけです。戦中までは、日本の植民地であった韓国の現在のソウル大学、京城帝国大学で帝国臣民を養成するためには国語学は重要であると主張していたということを、この頃いろいろの人が明らかにし始めているわけです。『植民地のなかの「国語学」』時枝誠記と京城帝国大学を巡って(三元社 一九九七)という本の中でも安田敏朗が克明に論証しています。時枝誠記といったら戦争中のことは誰も考えない。戦後「言語過程説」というのを唱えて日本のフェルディナンド・ソシユールと言われ、コード理論とかが始まった時にも、日本には時枝誠記がいるから何にも心配はないという主張が国語学者によってなされた時期もあつたぐらいの人です。この人は戦争中は京城帝国大学で朝鮮支配の片翼を担って、韓国人をよき帝国臣民に仕立てるためにどうしたらいいかというようなことをまじめに論議していた。その過程がこの本で明らかにされている。

大石さんも国語という言い方はすでにイデオロギーだと、だから客観的な表現ではあり得ないということを力説しているわけですが、それを系統的に明らかにしたのは、韓国から東大に留学して、いま一橋大学で社会思想史の助教役になつているイ・ヨンスクと言つた人であつた。

イ・ヨンスクさんの『国語』という思想 近代日本の言語認識(岩波書店 一九九六)という本の中に、日本の言葉というものは江戸時代までは琉球・沖縄の言葉があり、それぞれに方言があり、京都も方言の一つであつた。それが国という単位で共通語を作つて以来、地方色豊かな、音声的にもはるかに豊かな、たとえば東北の言語というのは音楽的な言葉であるにもかかわらず、そういう言葉は抑圧されて、ズーザー弁は劣つた言葉であるがごとく表現されて東北の人たちはいやな思いをした、という指摘があります。もともと東北は沖縄とともに差別の対象になる要素は十分にあつた。なぜかという縄

文の末期から弥生にかけて稲作が始まったとき、稲作を文化の根幹に据えようとした。古代末期まで東北地方に住んでいた人間は、どちらかということかなり遅い時期に米を作り始めた。米よりも豆とかイモとかを中心に生活していたところへ古代朝廷支配が東北に及んできて、東北の人間に稲作を強制し、田んぼに縛りつけて 収税対象ですね そのような形で国家のシステムを広げようとした中央政府。それに抵抗する前九年の役とか後三年の役とか、安倍氏に対して仕掛けられた戦争も実はそれを作り出すためであつた、ということが最近はいろいろ唱えられています。

多磨墓地を設計した菊池山哉さんが、『別所と特殊部落の研究』（東京史談会、一九六六）という大きな本で明らかにしたのは、そういう戦に負けて強制的にある所に固定して住まわせられて、それでも反抗的だと思われた人たちが関東から東北にかけて別所という名前を付けられた。これは土地の名前ですね。明治の初め壬申戸籍の始まる前は個人の姓、ふつうの家族の姓はなかった。何々村の何々工門だから、別所と称された人たちは何となく別所を通じて、戦前、今日もなお、そういう傾向がある。それから米を作るのが遅く、芋類は蓄積できないから一年も越せば腐ってしまつ。財産の蓄積ができないから貧しい、飢饉にあつても百姓達はすぐスカンピンになつてた。この部屋の犠牲になることが繰り返された。東北はそういう形で貧しいと決めつけられたし、そういうふうにも自らも考え、差別的な扱いを受けた。だから言葉すらおとしめられている。沖縄と同様に近代においても嫌な思いをすることが多かったと言えるのではないかと感ずるわけです。

国語の問題に戻つて、大日本帝国の時には国語の教師が東南アジアへも行く。昭和十二年に『日本語』という雑誌が創刊されて、その編集長におもしろいことに福田恆存がなつてゐる。彼は左翼嫌いだつたけれども、その洞察はいま見ると非常に鋭い。彼は日本語を強制的に教え込むことはばかばかしいと思

いながら編集長をやっていた、なかなかしたたかで二枚腰の人であった。

*アイヌから「国語」を見直す

国語の問題にはもう一つ、私が育った北海道、特に美幌のまちで経験したことがあります。アイヌ系の問題、そして日本の近代の公用語の問題。表記を漢字でやるという原則ですね。

来週チエコスロバキアから帰ったら、出版社の「ダイヤモンド」という雑誌が札幌へ来てインタビューするということです。何をしゃべるかというところ、「北海道が不況から脱出するにはどうしたらいいか、アイディアをしゃべってくれ」と。そんなものあるわけないでしょう。「できるだけ現実性のないことを言うからいい?」と言ったら、「その方がいいんですよ、どうせ誰も妙案があるなんて思っていないんだから」と非常に悲観主義者の編集者で、それなら景気づくよつな話をしようじゃない、開発庁がなくなるんだから、北海道はもう日本に恩義がないから半独立くらいにして、菅野茂さんに大統領になってもらって文部大臣に北海道に帰ってきてもらって総理大臣にする、このアイディアどおつと言った。それで皆アイヌの着物を着る日を一年に二回くらい決めて、独立国であるから雪祭りの季節になるとヒザをがっちり五万円ぐらいとる会場笑) チエコスロバキアに申請したときはヒザ四千円だったんですけれど、まあその十倍取ってもいいんじゃないかという提案になるかもしれないよと言ったら、大歓迎と、「それでよく雑誌やっていけるね」「ごっつせあきらめていきますから」「あきらめるんならやるんじゃない」といふふうに言っていたんです。

私は美幌町出身ですが、この「美幌」の読み間違えが非常に多い。日本人は漢字を音読みにしてそれ

をアイヌ語に当てはめて、意味は漢字の意味を押し付ける。漢字の意味を元あったアイヌ語におしかぶせている。それならば初めから音韻的には、カタカナでもまだ不満はあるという人もあるけれども、北海道の地名は元のままにしておいた方がいいのではないか。美幌はもともと「ピポロ」であった、半濁音なわけです。その方がどれだけチャーミングだかわからないでしょう。結局サトポロが札幌になったという例外があるにしても、ほとんどほかは半濁音は消えてしまった。今独立が目の前に来ているわけじゃないですよ、勝手にホラ吹いているわけです。考えたら、地名は行政的費用がどんなにかかってもカタカナに戻したほうが、観光政策からいっていいと思うわけです。私は中学、高校と網走ですからアパシリといったほうが女の子にももてたような気がする。

日本国の名においてアイヌの表記を漢字にした、漢字そのものには罪はない。漢字はその意味論的なことでいくとそれは非常に有難い言葉で、漢字と平仮名が混ざると全体的に柔らかい言葉になり、漫画と変わらなくなる。今日も講義で話したんだけど、江戸時代初期に、韓国と日本には同時に鋳型の活字、活版が入ったにもかかわらず、日本は仮名を混ぜたり、漢字も崩し字で書くようになったために一枚の木に彫ったほうがいいということになって、絵とともに活字が消えてしまった。ところが韓国は活字そのものが残って仮名はないですから、ずつつと漢字のままきた。漢字は四角いのが基本ですから、漢字の四角の源泉をたどっていけば四つの隅とかまたいろいろ象徴的な意味があるんだそうですけど、今日はこれ以上の問題に触れません。

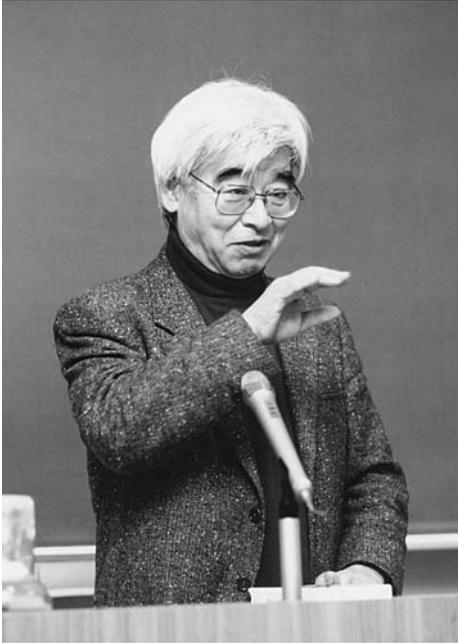
そこでアイヌのおばあちゃんの話ですが、美幌町で菊池儀一さんという人がいたわけです。この人は私が大学に入った年に五十六、七歳でした。美幌の町そのものがアイヌ人だけで、名前もピポロで、意味論的に言ってもアイヌ語の地名がはるかにいいことはアイヌに関する本を読むと誰でも分かると思

ます（アイヌ語の問題は、作家の津島佑子さんが『群像』（一九九八年十一月号）の「渦巻く文学をめざして アオテアロア（ニュージーランド）文学の現在」で、フランスのブルターニュ地方の言語差別と対比して述べている）。

アイヌの問題は、北方文化フォーラムでも言葉の問題を初めとして、アイヌの人たちのことを小説にした作家、長見義三を父に持つ写真家の長見有方さんに講演をお願いしたことがあり、このフォーラムの中では重要なテーマで、これからもあり続けると思っています。菊池さんの話に戻ると、私が大学に入って一年の時、近くの酒屋さんの御主人に紹介していただいてアイヌコタンの菊池儀一さんのところ

へアイヌのことを勉強したいから話してくれと行っただんですが、初めからシヨックだった。

「酒屋さんの北海道における位置とというのはどういうことか知っていますか？」知らないと言つと、アイヌ達は土地はかたっぱしから取り上げられるし希望を失って、やけくそになってやけ酒を飲み健康を害して結核になってバタバタと倒れ、結局は奥へと追いやられて、美幌でも平地にしか住まなかつたのがコタンという山の中に追いや



られている。菊池儀一さんのお父さん、菊池ウイントクは大首長といわれた人で、その碑だけは建っているんです。私の家の元町というところからスキーで裏の山を越えて行くとき頂上に近い丘に「菊池ウイントク大酋長の碑」というのが建っていた。この地一帯を支配していた大首長だった。あとで網走のことを調べていた時に菊池ウイントクは、網走の郷土館が建っている。ああいうところをチャシというんですね、地砦ですね。その辺一帯を支配していたというふうなことが書かれていた。その奥さんだった人が、私が大学に入った昭和二十六年、九十近い歳で生きていた。和人が入ってきてアイヌを酒でだまくらかして土地を奪い、鎧とかどうでもいいようなガラクタで土地を取り上げ、娘も取り上げた。それから国後・択捉クナシロ・エトロフエトロフなんかに連れていってものすごい重労働を課した。その菊池ウイントク首長の奥さんは息子の儀一さんに二階を作らせて、そこから絶対に降りてこなかった。北海道旧土人保護法が出来て、アイヌの子供たちも和人同様に学校に行くようにしろと言ったとき、そのアイヌの人たちは「学校に行かせても、ああいうひどい和人のような残酷で冷酷な人間になるから行かせない」といつて抵抗した人が多かった。おばあちゃんは六十何年も下へ降りてこないでよく運動不足で脚気にならなかつたと思っんですが、日本語を拒否して、あんな連中のしゃべる言葉は絶対覚えないうって、生涯アイヌ語だけしかしゃべらないで過ごした。これはものすごい反国語論になる、というふうな私の直接の体験なんです。

*二十一世紀のユートピア——言語をコンテキストから開放する

最近、日本記号学会で「言語とナショナルイティとジェンダー」という共通題でシンポジウムが行わ

れた。その時、成城大学の先生の一人が「英語による世界支配の歴史」ということで話を始めた。イギリスはアイルランドでそれを実験して、ゲール語というのが言葉として存在したけれど、書かれた文字でしか、駅の標示くらいしか残っていない。話せる人はほとんどいない。これは英国人の陰謀といえは陰謀で、ゲール語は潰された。それに対して、一九二〇年代フランスに住んで、ジャン・コクトーとかエイゼンシュタインともつきあっていた作家ジエームス・ジョイスが、『ユリシーズ』『フィネガンズ・ウエイク』という本を書いた。

要するにキリストの生誕から九日たったときのお祭り騒ぎを描いた『フィネガンズ・ウエイク』は英語をめちやくちやくにして引きちぎって、全ヨーロッパ・アジアも含む言葉の駄洒落なんかも乱用して、ただちよつと似ているだけでほとんど英語の体系を破壊したために、イギリス文学の中ではないへん評判が悪かった。けれども、最近ではこれを手をたたいて喜ぶ、英語支配に対して、ゲール語圏の作家が最初の反逆を起こした。しかしそれはただ恨みではなくて、言葉を広げることによって、もっと広いコンテキストに置き換えて英語をトランセンドするというふうな試みだった。二十一世紀はとにかくチヤンポン、クレオール文化という。今福教授が来たからそういう話がしばしばこでも行われるでしょう。クレオールのそういう実験的な試みを最初にやった人が「ジョイスだと言える」。

この記号学会で話題になったのも、実用性ということと英語は普及力を持っているけれどもどんな国語も言葉としては人間が自分の心のすみずみまで本当に表現したいように表現することは不可能である。しかしながら、詩人というのはどの文化にもいて、日常語から言葉を引き離して、音と意味との組み合わせを普通、通用しているものからほかの方へずらして使うことによって、自分が生まれてから使ってきた母語というものを別の形、言い換えれば詩的言語で外につなげる、そういうきっかけを

作っている。芸術家の仕事というものはもともとそういうところがあるはずである。本来のコンテクストから離れた時に物はその美を表そうとするから、その、自然が現れるのを助けるという意味では、本日も来ておられる小樽の画家大島裕さんの、小樽の古くなってビビの入った壁でフロッタージュをやったその上に色を施し、人工性と自然の介入によってそこに表れてきた美をタブローに写し換えているという試みにもつながる。

また音楽では、イタリアのルチアーノ・ベリオという作曲家も、奥さんであったキャッシー・バベリアンというアメリカの素晴らしい声の歌手、この人に実験的にいろんな声を出してもらってコンピューターにかけて音の原理をその中から発見し、声そのものをぶった切って作り変えていくという仕事をしている。そういう試みが、日常的な言語に閉ざされた人の心を広く開いていく力になる。だから英語といても例外ではないはず。アメリカの俳優はクイーンズ・イングリッシュに対してコンプレックスをもっているからシェイクスピアをあまり上演しようとはしないという話を聞いたことがあります。アメリカ訛りでシェイクスピアをやったらこんな滑稽なことはないということくらいちよつとは分かっている。日本人はシェイクスピアさえやれば観客が来るなんて逆に思いこんでいるから、それはそれでよろしいですけども。

言葉を一度文脈から開放するという試み、それが二十一世紀のユートピアであり、大宇なんかもそういうユートピアを作る足場を提供する使命を持っているというあたりを結論に、この話を終わらせていただきます。